

## 子育て期の母親の自己効力感に関する臨床心理学的研究

—今後の子育て支援のあり方の模索—

心理臨床学専攻 竹之内 円

### I. 問題・目的

わが国において、子育て支援として国の施策で初めて制定されたものが、1994(平成6)年の「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について(エンゼルプラン)」であり、その後もさまざまな取組みがなされている。また、国の施策以外でも、多くの自治体や保育所などによりさまざまな子育て支援が取り組まれている。

しかし、現実では児童虐待や、親の育児不安・育児ストレスといった育児に関する問題が取り上げられることは少なくなく、このことから、今現在取り組まれている子育て支援のあり方と、母親たちが子育て支援に求めていることにずれが生じているのではないかと考えられる。そこで、子育て支援に関する先行研究を読んでいくと、母親たちは子育てをしながらも、一人の人間として自己実現したい気持ちを持ち続けたいと願っていることがわかった。(今井・坂, 2002)。

さらに、さまざまな先行研究を調べていくと、「近年、母親の認知的側面に焦点が当てられた研究が多くなされるようになってきた(田坂, 2003)」として、育児における自己効力感に視点をあてた先行研究があった。

そこで筆者は、自己効力感が、子育て期の母親にとって大きな意味をなしているのではないかと考え、母親としての自己効力感を支える要因は何か、どのような支援が必要であるかを明らかにしたいと考えた。そして前述しているように、現在行われている子育て支援と母親が求めている支援にずれを感じていることから、母親が子育て支援に何を求めているのか、ということと、さらに、母親たちの「一人の人間として自己実現」という気持ちにも注目し、母親でありながらも個としての自分をどの様に捉えているかを明らかにしたい。

そこで本研究の目的を、母親としての自己効力

感の因子構造を明らかにし、それらの側面が子育てに関する外的・内的要因と母親である個としての自己概念にどの様に関連し、影響を与えているかを明らかにすることとする。またそれらの結果をふまえて、今後の子育て支援のあり方について考察していく。

### II. 仮説

1. 母親としての自己効力感には、子育てに関する外的・内的要因が影響を及ぼす。
2. 母親である個としての自己概念には、母親としての自己効力感が影響を及ぼす。

### III. 研究方法

#### 1. 調査期間・調査対象

平成19年10月から平成20年3月に鹿児島県内の保育園・幼稚園に子どもを通わせている母親、また子育て支援センターに通っている母親を調査対象とし、そのうちの有効回答数1049名(有効回答率83.0%)を分析対象とした。

#### 2. 調査項目

独自に作成した質問紙。質問内容は、「母親としての自己効力感」は母親としての自分の気持ち、「子育てに関する外的・内的要因」は育児の現状、「母親である個としての自己概念」は日常生活で感じていることや夫婦関係についてである。また自由記述として、子育てに関することも質問した。

### IV. 結果・考察

#### 1. 因子分析(主因子法・プロマックス回転)

母親としての自己効力感は、「肯定的感情」、「母親役割への自信(以下、母親役割自信と記す)」、「子育てに関する問題を解決できる自信(以下、問題解決自信と記す)」、「否定的感情」の4因子が抽出された。子育てに関する外的・内的要因は、「人的支援」、「母親である自分への違和感(以下、違和感と記す)」、「標準発達に対する強迫観念」、「子育てに関する知識不足(以下、知識不足と記す)」、「夫の子育て協力」の5因子が抽出され

た。母親である個としての自己概念では、「夫との心理的絆」、「充実感」、「存在価値」、「視野の広がり」、「交友関係」の5因子が抽出された。

## 2. 各尺度間の影響

(1)子育てに関する外的・内的要因(以下、子育ての要因)と夫との心理的絆が母親としての自己効力感(以下、自己効力感と記す)に及ぼす影響  
自己効力感と子育ての要因との相互関係を分析するために、子育ての要因を独立変数とし、自己効力感を従属変数とする重回帰分析を行った。また、夫婦関係も母親の感情に影響を与えているということから、夫との心理的絆も独立変数に加えて分析をした。

その結果、自己効力感においては、「違和感」と「知識不足」が一貫して影響を及ぼしており、「肯定的感情・母親役割自信・問題解決自信」といった肯定的な側面には負の影響を、「否定的感情」には正の影響を及ぼしていた。しかし、「人的支援・夫の子育て協力」では「人的支援と肯定的感情」以外には、有意な値は示されず、自己効力感には、人からの支援はあまり影響を与えていないということになる。つまり、母親としての自己効力感を支えるためには、母親としての自分をどの様に捉え、母親である自分を肯定的に認めていくことができるような、いわゆる心理的な支援が必要となってくると考えられる。これらのことから、自己効力感には、子育ての要因が影響を及ぼすという仮説は、一部では立証され、また棄却される部分もあったということとなった。

さらに、「人的支援」と「夫との心理的絆」は「肯定的感情」に正の影響を与えているが、「否定的感情」では影響がみられなかった。つまり、母親が否定的感情を抱いているときには、周囲からの子どもの世話というような人的支援や夫との関係では否定的感情を軽減することはできないということになる。このことから母親の心理状況のあり様によって、支援のあり方を変える必要があるということになる。

(2)自己効力感が母親である個としての自己概念(以下、自己概念と記す)に及ぼす影響

自己効力感と自己概念との相互関係を分析するために、自己効力感を独立変数とし、自己概念

(充実感・存在価値・視野の広がり)を従属変数とする重回帰分析を行った。

その結果、「視野の広がり」においては「肯定的感情」しか影響を与えていなかった。このことは、今回の対象者の属性の影響が考えられた。今回の対象者は今現在、子育ての真っ只中と考えられるので、そのことから、「新しい自分を発見する」余裕であったり、「努力した結果、報われたと感じる」という、努力した結果が、まだ見出せていないのではないかと考えられる。「充実感」、「存在価値」の結果の特徴としては、「充実感」には母親としてのアンヴィバレントな心理状況が影響しており、「存在価値」には自己効力感の肯定的な側面が影響を与えていた。

これらのことから、自己効力感が自己概念の全てに影響を与えるということはなく、自己概念には自己効力感が影響を及ぼす、という仮説は棄却されると考えられる。しかし、すくなくとも母親の肯定的な感情や自信が、個としてのあり様に影響を与えるということは考えられた。

## V. まとめ

本研究の結果を概観すると、母親の心理状況によっては、一様の子育て支援を行っても、その有効性は違ってくるのがわかり、母親の心理状況にあわせて、支援のあり方を変えていく必要性が求められていることが考えられた。否定的感情を抱いている母親には、母親である自分を肯定的に認めていくことができるような支援を行い、そしてその段階を経て、肯定的感情を抱けるようになると、そこで周囲からの支援や夫との関係を強め、さらに肯定的感情を高めてく。そのことがまた、一人の人間としての成長にもつながっていくのではないかと考えられた。このように、母親の心理状況にあわせた多様化した子育て支援が、今後は必要とされてくるのではないかと考えられる。

## <引用文献>

- 今井靖親・坂鏡子 2002保育所における子育て支援の現状と課題(4)——アンケート調査結果からみた育児困難の実態——  
桜花学園大学研究紀要, 4, 1-26.  
田坂一子 2003 育児自己効力感 (parenting self-efficacy) 尺度の作成 甲南女子大学大学院論集創刊号 人間科学研究編 1-10.